The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本人論と仏教 ： 山本七平の鈴木正三論をめぐって
Author(s)	加藤, 均
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 7-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本人論と仏教
――山本七平の鈴木正三論をめぐって――

加藤　均

はじめに

日本人論とは、「日本人の文化、社会、行動・思考様式の独自性を体系化、強調する言説」[1] といえるものである。この「日本人論」について船曳建夫は「近代の中に生きる日本人のアイデンティティの不安を日本人とは何かを説明することによって取り除こうとする性格を持つ」ものであり、近代を生み出した西洋の地域的歴史に属さない日本が近代化しようとした結果、不可避的に生じたアイデンティティの不安であり、根源的であるが故に解消されない不安が常に新たな不安が生み、そのつど新たな日本人論が生み出されるとする[2]。

また、ここでは、価値判断がともなう「日本人はXXXであるべき」という規範的命令が「日本人はXXXである」という事実命題に変換されるため、イデオロギーとしての機能を備え[3]、文化ナショナリズムの一形態として捉えられることになる。

こういった日本人論は、特に、高度経済成長期から安定期に移行する、1970年代後半から80年初頭にかけてその最盛期を迎えたと言われるが、もちろん今もその生産が止まったわけではなく、21世紀になってベストセラーとなった藤原正彦の『国家の品格』[4] は、記憶に新しいところであろう。

一般に、戦後の日本人論では、自己の集団を他の集団を区別できる文化的・社会的特徴として、たとえば、集団主義、甘え、恩義、黙約などの叙述概念が使用され、それが日本人全体に適用されることになるが、歴史的に言っても、日本の文化・社会に圧倒的な影響を与え続けてきた仏教との関わりのなかではどのように語られるのであろうか。

日本仏教が仏教である限り、特定の集団・地域を超える普遍的価値を希求するものであり、ナショナリズム的な言説との軋轢を生み出すため、この点を回避しなければ、仏教的要素を日本人論に組み込むことはできない。こういった中、創り出されてきたのが、1979年の出版当時ベストセラーとなった山本七平の『日本資本主義の精神　―なぜ一生懸命働くのか―』（光文社刊）に現れた鈴木正三論である。

ここで、山本は、日本資本主義を支えたのは日本人の勤勉の精神であるとし、その源流を形作った思想家として、戦国末期から江戸初期という時代の転換期を生き抜いた禅僧、鈴木正三（1579–1655）を取り上げ、正三が提唱とした職業倫理に基づいた日本人論を構築する[5)]。これは、ハルミ・ベフがいう「大衆消費財」[6)]としての泡沫的な「日本人論」とは異なり、現在にいたるまで幾度となく取り上げられ、その命脈を保つことになるのである[7)]。

この鈴木正三論について、学術的世界との関係、その後の展開、そして戦前の思想状況との対比といった、より広い視点から再考しようとするのが、本稿の目的である。

1. 鈴木正三の職業倫理について

鈴木正三は、安易な出家主義をいましめ、士農工商がそれぞれの職分を尽くすことが仏道修行に他ならないとする「職分仏行説」といわれる職業倫理を提唱した仏教思想家である。ここで、本題に入る前に、正三の職業倫理の概要を把握するために、その中核をなすものとして注目されてきた「世法則仏法」という考え方を含め、『四民日用』（『万民徳用』として「三宝之徳用」、「修行之念願」と合本され1661年に版行）に基づき紹介しておきたい。

正三は「四民日用」のなかで、士農工商の身分（四民）それぞれについて、その日常生活の心得といったものを論じている。

最初の「武士日用」で、

> 世法仏法。車の両輪のごとしといへり。然れども、仏法なくとも、世間に事闕べからず。何ぞ車の両輪に譬たるや。

と言う、ある武士の問いに対して、次のように答える。

仏法世法二にあらず、仏語に、世間に入得すれば、出世余なしといへり、仏法も、世法も、理を正、義を行て、正直の道を用の外なし。－中略－　凡夫は先病を知るべし、生死無明の心中に、顚倒迷妄の病あり。慳貪邪見病有、怯弱不義の病有、三毒の心を根本として、八万四千の煩悩の病となる。此心を除滅するを仏法といふなり。これ則世法にことならんや[8)]。

ここで、正三は世法と仏法が車の両輪のように支え合うものではなく、両者を同一のものとして捉える立場を表明し、続けて言う。

仏道修行の人は、まず勇猛の心なくして、叶い難し。怯弱の心を以、仏道に入事有べからず。堅守、強修せずば、彼の煩悩に随て苦患を受くべし。堅固の心を以、万事に勝を道者とし、着相の念にして、万事に負て苦悩するを凡夫とす。去ば、煩悩心を以、血気の勇を励す人、一旦鉄壁を破る威勢ありといへども、血気終に尽て変ずる時節あり。丈夫の心は、不動にして、変ずる事なし。武士たる人、これを修して、何ぞ丈夫の心に至らざらんや[9)]。

つまり、仏道修行は武士としての不動心を養うことに他ならないとするのである。正三の晩年の語録である『驢鞍橋』（下巻13）にも、世法則仏法を解説する際にしばしば引用される次のような箇所がある。

我元ヨリ家職ヲ捨テ、法ヲ求ムルコト嫌也。殊ニ侍ノヲツキル杯ハ、カヂケタ心也。修行ノ為ニハ奉公ノ過ギタルコトナシ。出家シテハ却テ地獄ヲ作ラルベシ。奉公則修行ナリト、再三示シ給フ[10)]。

これは、剃髪を請う旗本の子息に、安易な出家を誡め、翻意を促す正三の言葉であり、ここでは武士にとって奉公こそが修行であることが端的に述べられている。

さて、次の「農民日用」では、

後生の一大事、疎ならずといへども、農業時を逐て暇なし。あさましき渡世の業をなし、今生むなしくして、未来の苦を受べき事、無念の至りなり。何としてか仏果に至べきや。

との農民の問いに対して、正三は「農業則ち仏行なり」とし、

一鍬一鍬に、南無阿弥陀仏、なむあみだ仏と唱え、一鎌一鎌に住して、他念なく農業をなさんには、田畑も清浄の地となり、五穀も清浄食と成て、食する人、煩悩を消滅するの薬なるべし[11]。

と答える。

続いて、「職人日用」では「何の事業も皆仏行なり」[12] と述べ、「商人日用」では

一筋に国土のため万民のためとおもひ入て、自国の物を他国に移、他国の物を我国に持来て、遠国遠里に入渡し、諸人の心に叶べしと誓願をなして、国々をめぐる事は，業障を尽すべき修行なり[13]。

と説く。

また、「職人日用」では、

諸職人なくしては、世界の用所、調べからず。武士なくして世治べからず。農人なくして世界の食物あるべからず。商人なくして世界の自由、成べからず。此外所有事業、出来て、世のためとなる。

と述べ、それぞれの職業が社会を成り立たせるための有用な機能を有すると捉えるが、それをまた「本覚真如の一仏、百億分身して世界を利益するなり」[14] と再解釈することで、世法則仏法という考え方を補強していくのである。

こういった、世俗的職業生活と仏道修行を同一視する正三の考え方それ自体は、聖俗の分離の傾向が強い当時の仏教界においては他に類を見ないものであったのは確かであるが、これをどのように思想的に評価するのかが問題となるのである。

2. 山本七平の鈴木正三論をめぐって

正三の提唱する職業倫理について、山本七平は「この中、職人が物を作り出すことを一仏の徳用とし、また商人が完備した流通機構を作り出すことも人を自由にするという発想はきわめて近代的であると言わねばならない」と述べ、「これが新しい職業観の確立となり、同時に日本資本主義の倫理の基礎となっても不思議ではない」[15] とする。

そして、外国で「禅」について質問されたときは、禅とエコノミック・アニマルは同じ発想から出ているとして、

> 日本人が働くのは経済的行為ではなく、「仏行外成作業有るべからず」と信じ、一切を禅的な修行でやっているにほかならない。農業則仏行であり、サラリーマン則仏行であり、働くことすべて仏行、メーカーが物を作り出すのは一仏の分身として利益するため、またサラリーマンは巡礼である[16]。

と答えることにしていると日本人の文化的特殊性を強調する。その一方で、それが西欧資本主義を生み出したピューリタン的な世俗内禁欲との機能的な類似性をもつことを随所に示唆し、日本が近代化を成し遂げた、即ち資本主義化した理由としていくのである。

このようにして、正三の倫理思想を一躍有名にしたのは山本七平であるが、その捉え方は彼の独創ではない。著名なインド哲学・仏教研究者であり、比較思想学会の創始者でもある中村元が戦後まもなく『近世日本における批判的精神の一考察』（1949年）において、すでに、これを西欧資本主義の発展を支えたプロテスタント倫理に匹敵する近代合理的精神の先駆けと評しているからである。

とは言え、両者の説には本質的な違いがある。それは、中村が、

> 西洋の宗教改革者の職業倫理説は現実の力となりえたけれど、正三のそれは、現実社会の経済的変革をもたらすところまでは到達しえなかったのである。マックス・ウェーバーはいみじくも、日本の宗教史においては、国家は宗教保護者（Schutzpatronat）ではなく、宗教警察（Religionspolizei）にすぎな

かったと批評しているが、まさにこの宗教警察の絶大な圧力が、日本の宗教を萎縮させ、当然現実の力として発展しえたところの資本主義展開をめざす一つの仏教運動を、その萌芽の状態において封殺してしまったのである[17]。

と断じているからである。

このように、中村説では「その萌芽の状態において封殺してしまった」との歴史的な認識が語られているが、他方、中村説の「翻案作品」ともいうべき山本説では、日本人が無意識に形成してきた労働倫理なり、職業倫理なりを仏教的論理をもって正三がはじめて言語化し、体系化したと捉え、中村のこの認識は無視される。「自分で自分を表現できない日本文化を表現した正三」[18]、ここに日本人論としての眼目がある。

もちろん、仏教研究者と日本人論作家の言説を同列に扱うことはできないのは当然であるが、問題はその後の展開にある。この中村説の存在により、山本説は通常は学的には認められることのない一過性の日本人論とは一線を画すことになり、その命脈を保つことになるからである。

その端的な例が、1999年に出版された堀出一郎の『鈴木正三　日本型勤勉思想の源流』である。題名を見るだけでも分かるように、これは、山本の鈴木正三論を踏襲するものであるが、中村説がその論拠として用いられている。

この一般の職業生活と佛道修行とのつながりを取り上げ「これこそ正三の思想のもっとも著しい特徴」と説いたのが中村博士であります。さらに、中村博士は「かくも大規模に職業理論を展開し、世俗的職業生活がそのまま佛道修行であるということを強調したのは、日本佛教史上においては、おそらく鈴木正三が最初の人であろう」と強調されます。

最初にお話しした山本七平も、日本人の勤勉性は、「働くことは善いことだ」という、江戸時代以来の、民衆の心の底に埋め込まれてきた思想に由来するものではないかと主張したのであります[19]。

しかし、堀出の書のどこにも、先ほど述べた中村の歴史認識はとりあげられる

ことはないのである。

このように山本説と中村説が交差するのは、上述の書だけではない。最近、鈴木正三の全著作及びその弟子、恵中・雲歩の著作の翻刻版を出版した神谷満雄が2001年に刊行した『鈴木正三　―現代に生きる勤勉の精神』でも同じく見られるものである[20)]。

また、正三の思想の中に近代合理性を見出す中村説そのものにも、その対論となる封建主義的解釈が家永三郎や柏原祐泉などの歴史学者によって提起されてきたことも忘れてはならない[21)]。ヘルマン・オームスがいみじくも語っているように、

> もし、正三を発展史的ないし比較論的地平で研究するのではなく、彼の教えを同時代の状況のなかで調べるならば、その政治的な狙いは明白である。それは庶民に対して、もっとも切迫したやり方、すなわち宗教的なやり方で、17世紀初め日本の新しい社会的政治的制度において割り当てられた場所につくように命じたのである[22)]。

とは言え、2000年に出版された『比較思想辞典』では、

> 「世法則仏法」の職業倫理を説いた鈴木正三にいたって、仏教の経済倫理は最も近代性を帯びることになった。―中略―　正三の仏教的職業倫理と、そこに見られる彼の経済倫理は、近代西欧の「資本主義の精神」を生み出した禁欲的プロテスタンティズムの倫理に匹敵する規模の大きなものである[23)]。

と対論を併記することもその歴史認識も語られることなく、中村説の骨格が記載され、それのみが学的な定着度を増すことになる。そして定着度が増せば増すほど、日本人論としての山本説の定説化が進むという、中村自身は予期しえなかったであろう波及効果を生むのである。

さらに付言すれば、2004年に公刊された直木賞作家の長部日出雄の『仏教と資本主義』では、鈴木正三の職業倫理を日本資本主義の精神の先駆けとして自明のものと捉えるだけでなく、さらに時代をさかのぼり、その本源が追及される。

そして、行基の利他の菩薩行がそれであり、「わが国には、八世紀の天平時代、すでに〈資本主義の精神〉が存在していた」[24] とまで主張するに至るのである。

3. 戦前における仏教の日本宗教化の動き

さて、最後に、戦前の思想状況との対比という視点から、明治以降に現れた仏教に関わる日本人論的言説について触れておきたい。

明治の近代化の中、日本人のアイデンティティの本源を仏教に求め、その日本宗教化のための論理を最初に構築したのは、護国愛理を提唱した仏教思想家、井上円了（1858–1919）であろう。

円了は、その初期の著作『真理金針』で、「（仏教は）今日に至りてすでに千有余年わが国に伝来し、その人心に感染する」とし「かつ他邦にその極理のすでに跡を絶して、ひとり日本にその全教をみるをもって、これを日本自国の本教というのも不可なることなし」[25] と主張することで、仏教を日本の宗教として位置づけようとする。そればかりか、明治期のベストセラーで主著の一つとして挙げられる『仏教活論序論』では、さらにこの立場を進め、次のように述べている。

> およそ物その初め他邦に産するも、これを自国に将来して数年力をその培養の方法に尽くし、今日幸いにその良種を得るに至り、しかしてその本国にありてはすでにその種を絶し、またこれを再培するに勢いなきときは、これを自国特有の産物として他邦に輸出するもあえて不可なる理なし、果たしてしからば、今日の仏教は日本の仏教なり、日本の特産なり。今後ますますこれをわが国に培養して、遠く外国に流布せざるべけんや[26]。

日本にだけ仏教という深理が残ったのであるから、それを活性化させれば、そのままグローバルに適用可能となるという一種の逆説を生む。つまり、ナショナリズム的な言説がそのままで、日本人や日本という特定の集団・地域を超える普遍的価値を有するものになるのである。

こういった発想は日蓮主義の提唱者、田中智学（1861–1939）にも見られる。智学は国体主義のイデオローグとして、その思想は戦後、徹底的な批判を受けた

ため、現在ではあまり名が知られていないが、戦前においては「影響力の大きさから言えば日蓮系では智学以上の人物はいない」[27]と評される仏教思想家である。

その教学的主著『日蓮主義教学大観』で、

> 釈尊は法華経を残した目的は、末法という濁悪闘争の時代をピンドとして、説かせられたから、その末法を去れば去る程、法華経の真相がボンヤリして来るので、末法に至て聖粗（日蓮）が法華経を解釈して、よくその深妙の極地に達したのは、釈尊の智慧に天台伝教等の智慧に加上て発展したのではなくて、釈尊が光線、ピンド、焼き其の他の度を、末法に合して置かれた、それを其方の如く写真に焼いたのが、聖祖所立の本化妙宗の宗義であるのだ[28]。
> （　）は筆者が挿入

と述べているように、末法史観を前面に出すことで、自らが信奉する日蓮の法華経解釈、即ち本化妙宗の日本宗教化をおこなおうとする。そして、その普遍性の故に本化妙宗は当然の帰結として「日本国家ノ應サニ護持スベキ宗旨ニシテ、亦未来ニ於ケル宇内人類ノ必然同帰スベキ一大事因縁ノ至法」[29]となるのである。

円了にしても、智学にしても、無論たんなる日本人論作家ではない。ある意味、真摯な仏教改革論者と言えるが、仏教（智学の場合は日蓮仏教）を日本人の精神性の根幹として捉えよう彼らの思考は、戦後、帝国主義的イデオロギーを支えたものとして批判され、その影を潜めていくことになるのである。

しかし、戦後においても、実際のところ、戦前のように仏教の日本宗教化を行わない限り、仏教的要素を日本人論に正面から組み込むことは難しい。冒頭に述べたように、日本仏教が仏教である限り、特定の集団・地域を超える普遍的価値を希求するものであり、ナショナリズム的な言説との軋轢を生み出すからである。

すでに触れたように、山本七平の言説ではこの問題が巧妙に回避されていると言える。山本は鈴木正三という一人の仏教思想家を取り上げ、日本人が無意識に形成してきた労働倫理なり、職業倫理なりを仏教的論理をもって正三がはじめて言語化し、体系化したと捉えることで、仏教の伝播史や日本における発展史といったものとの切り離しを行っているからである。これは、ある意味、鈴木大拙が

『日本的霊性』の中で言う「初めに日本民族の中に日本的霊性が存在していて、その霊性がたまたま仏教的なものに逢着して、自分のうちから、その本来具有底を顕現した」[30] とする考え方を彷彿させるものである。

おわりに

山本の鈴木正三論は、近代を生み出した西洋の地域的歴史に属さない日本が近代化しようとした結果、不可避的に生じたアイデンティティの不安を解消するという意味では、非常に有効に働くゆえに、一般に大きな支持を得たのであろう。

そして、当初は日本人論の世界では山本説が、学術的世界では中村説が並行して論じられてきたが、2000年前後から両者が交差しはじめ、山本説は中村説によって補強されるという、他の日本人論には見られない道行きを辿ることになるのである。

註

1）吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』（名古屋大学出版、1997年）p. 4

2）船曳建夫『「日本人論」再考』（NHK出版、2003年）p. 36

3）ハルミ・ベフ『増補版　イデオロギーとしての日本文化論』（思想の科学社、1987年）pp. 36–53

4）藤原正彦『国家の品格』（新潮新書、2005年）は、2005年11月発売され、2006年5月にはその発行部数は265部を超えたとされる。

5）山本七平は現代と江戸時代をつなぐ思想家として、もう一人石田梅岩を挙げているが、あくまでも出発点は鈴木正三であるので、梅岩についての議論はここでは扱わない。

6）ハルミ・ベフ『増補版　イデオロギーとしての日本文化論』（思想の科学社、1987年）pp. 54–67

7）山本七平『日本資本主義の精神』（光文社1979年）はその後、1997年に理想社刊の『山本七平ライブラリー⑨』に再録され、2006年にはビジネス社から再版されている。

8）鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』（山喜房仏書林、1975年）p. 64
鈴木正三の全著作及びその弟子、恵中・雲歩の著作の翻刻版については、上記の他、神谷満雄・寺沢光世編・校注『鈴木正三全集』全2巻（鈴木正三研究会、上巻

2006年、下巻2007年）がある。

9）前掲書 p. 65

10）前掲書 pp. 238–239

11）前掲書 pp. 68–70

12）前掲書 pp. 70–71

13）前掲書 pp. 71–72

14）前掲書 p. 70

15）山本七平『日本資本主義の精神』（光文社 1979年）p. 133

16）前掲書 pp. 137–138

17）中村元『近世日本における批判的精神の一考察』（三省堂、1949年）p. 174

18）山本七平『日本資本主義の精神』（光文社 1979年）p. 118

19）堀出一郎『鈴木正三―日本型勤勉思想の源流』（麗沢大学出版会、1999年）p. 22

20）神谷満雄『鈴木正三―現代に生きる勤勉の精神』（PHP文庫、2001年）pp. 41–44, pp. 86–87

21）家永三郎『日本道徳思想史』（岩波全書194、1954年）柏原祐泉『近世庶民仏教の研究』（法蔵館、1971年）を参照

22）ヘルマン・オームス『徳川イデオロギー』（ぺりかん社、1990年）p. 165

23）中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想辞典』（東京書籍、2000年）p. 143

24）長部日出雄『仏教と資本主義』（新潮新書063、2004年）p. 77

25）井上円了『井上円了選集』第3巻（東洋大学、1987年）p. 122

26）前掲書 p. 338

27）末木文美士「鈴木正三―人と思想」（『日本仏教思想史論考』（大蔵出版、1993年）p. 255　ここで、末木は高山樗牛も宮沢賢治も石原完爾も、いずれも智学の影響下に立っているとする。

28）田中智学『日蓮主義教学大観』第1巻（真世界社 1993年）、p. 430
（当初、『本化妙宗式目講義録』として1904～1913年に刊行され、1915年に『日蓮主義教学大観』と改題され天業民報社より出版。）

29）田中智学『宗門維新』（師子王文庫、1903年）p. 2

30）鈴木大拙『日本的霊性』（岩波文庫版 青323-1　1972年）p. 65（但し、初出は大東出版社、1944年）

〈キーワード〉鈴木正三、職分仏行説、山本七平、中村元

Nihonjinron (Discourses on Japanese Identity) and Buddhism

—Focusing on Yamamoto Shichihei's Discourse on Shosan Suzuki—

Hitoshi KATO

The purpose of this paper is to reconsider Yamamoto Shichihei's discourse on a Zen priest named Shosan Suzuki (1579–1655) appeared in his book, *the Spirit of Japanese Capitalism*. Yamamoto compared Protestant ethics with Buddhist work ethics as set forth by Shosan Suzuki, evaluated his view as being "modern" and regarded it as an ethos of Japanese capitalism, based on a study of Shosan's thoughts by a notable Buddhist scholar, Hajime Nakamura.

In this paper, the first chapter gives an outline of Shosan's work ethics based on his book *Banmin Tokuyuu*. The second chapter examines differences between Yamamoto's and Nakamua's theories, and discusses a further development of ethnocentric/nationalistic interpretations derived from Yamamoto's view. The final chapter attempts to describe characteristics of pre-war Nihonjinrons related to Buddhism in comparison with Yamamoto's theory.